

可憐な美少女のエクスタシー

～ お姉ちゃんの彼氏を寝取っちゃった～

直輝／NAOKI

第一章

「やっぱり、痛かった？」

希美は手に持ったコーラを飲むのを忘れて、身を乗り出して恵美の初体験の話に聞き入った。

「痛かったよ、股が裂けそうな感じで……」

「ふ～ん……」

希美がごくりと唾を飲み込んだ。

「でも、彼、優しくかったよ。痛かったら我慢なくていいんだよ、とか言ってくれて」

「……怖くなかった……？」

「そりゃあね。でも、前に彼の家でエッチしたとき、すごく痛くて途中で入れないで止めたんだから……だから、もしかしたらまた痛くて入れれないかなあって思ってたので、すごくうれしかった。

血はいっぱい出たけど……」

「よかったね」

「で、彼は、痛い？ とか何度も何度も聞いてくれて、私は大丈夫って言うてるのに、ほんとは痛いだろ？ ってまた何度も聞いてきて……。で、彼が、痛くなくなるまでこのままでいようかって言ってくれてその体勢のまま抱き合ってたの」

「それから？」

「もう、いいじゃん」

「えっ？ これからじゃないの？」

「もう、おしまいよ……彼がちょっと動くよとか言って、自分で動き出したの。それで、彼が爆発してお終い」

「爆発って？」

「もう、いや！ 恥ずかしい！」

「教えてよ」

「出したって事、精子を」

「え～？ 大丈夫なの」

「うん……でも、まだ痛いよ。おしっこしたときなんか」

「そうじゃなくって、妊娠よ」

「外に出したから大丈夫よ」

「でも、それは危ないって本に書いてあったよ」

「それは、抜くとき、中でちょっと出しちゃうからでしょ？ 全部外で出せば大丈夫よ」

そういって、恵美は希美に顔を近づけ、囁くように言った。

「私、見ちゃったの、出る瞬間を」

「えっ？」

「彼がイキそうって言って、抜くから手でしてって.....私の手を取ってアレを握らせたの」

「.....」

「で、手で少しシコシコしたら、彼が私のお腹の上でイッちゃったの。先っちょから出るの見ちゃった」

「やった～、えっち～」

「精子ってあったかくて、真っ白で.....でも臭いんだよ」

「ふ～ん」

一時間にわたる恵美の初体験話も終わり、ふたりはファーストフード店を出た。

「もう、恵美もバージンじゃないのね.....」

「なににしみりしてんのよ。でも、こんなもんかって感じよ、実際。たいしたことないんだから.....」

「でも、バージンは私だけになっちゃったな」

「あんたも、彼氏が見つかればすぐに卒業よ」

希美の家の前でふたりは別れた。

家に着き、希美はドアを開けようとノブを回した。

(アレ？ 鍵がかかっている.....お母さん居ないんだ.....そっか！ 今日は英会話の日なんだ)

希美は鍵を靴から取り出しドアを開けた。家の中は薄暗く、どことなく寂しさが漂っていた。

階段を上がり、廊下の突き当たりの自分の部屋に入った。

靴を机の上に置き、カーテンを引いて椅子に腰を下ろした。肘を机に載せ、顎を手の平で受け、希美はしばらく物思いに耽った。

「ついに私だけか.....」

クラスみんなが経験済みというわけではなかったが、希美の親しい友人はみんな初体験を済ましていた。自分だけが出遅れて取り残されたような気持ちがして寂しさを感じていた。

「ホントに私もするのか.....セックス.....」

希美は先ほどの恵美の話の内容を思い出してときどきしてきた。

(やっぱり、初めは痛いんだろうな.....。でも、美佐江は、痛いのは初めだけで、すぐに気持ちよくなったというし.....。恵美は精子が臭いって言ってたけど.....どんな匂いがするのかしら...)

希美は湧き起こってくるイライラする感情にどんどん憂鬱になっていった。特に最近、このムラムラとした感情に苛立ち、母に当たる事もあった。しかし、思春期の精神的不安定だと思えば、母親はさほど気にしていない様子だった。

先日、学校の体育の時間に男子と温水プールで一緒になった。希美は、知らないうちに男子の股間の膨らみを盗み見している自分に気づき、恥ずかしくなった。

そういう日は家に帰っても、一日あの膨らみが頭の隅を離れなかった。

自分の体が自分のではないような違和感.....。

どうしたらこのモヤモヤとした感情を解消できるのか、希美にはまったくわからず、勉強にも手がつかなかった。

(美佐江にも恵美にも彼氏がいるのに.....私の方がずっと可愛いのに.....クラスの男たちはどこ見てるのかしら.....)

希美は焦りと渴望を感じていた。じっとしてられなくなり、やがて立ち上がって部屋の中を歩き始めた。頭の中は淫靡な妄想に支配されていった。希美はいつしかパンティの上から自分の性器を撫でていた。

「ああ.....」

希美はベッドの脇においてある目覚まし時計を見た。

(お母さんはまだまだ帰って来ないし.....)

この心の疼きを鎮めようと部屋を出て、階下のバスルームに向かった。

ドキ・ドキ・ドキ.....

これから自分のすることを想像して心臓が高鳴り、息がちっと苦しくなってきた。

バスルームのドアを開け、ゆっくり服を脱いだ。

全裸を鏡に映した。肌は透けるように白く、すべすべで光り輝いていた。線の細い顎、細い首、鼻は高く美しく、瞳は薄いブラウンで柔らかな優しい印象を与えた。

そして、可憐な身体には一見不釣り合いに見える白くて大きな乳房は、同性のクラスの女子生徒でさえ魅了した。

学校中の男子の心を虜にするには充分すぎるほどの魅力を希美は持っていた。事実、希美の裸を妄想して毎日オナニーに耽っている男子生徒も多いた。

しかし、その美しさが気の弱い男子学生には高嶺の花に映り、高貴で近寄りたがたい、憧れの存在になっていたのだ。希美はそのことを知る由もなかった。

(こんなに綺麗なのに.....だれよりずっと綺麗なのに.....)

希美は人一倍好奇心の強い女の子であった。しかし、その好奇心を満足させるだけの情報を持っていなかった。

希美はこれからする淫らな行為を想像し、さらに心臓の鼓動は早まっていった。

希美は鏡を見ながら、形のいい大きな乳房を握ってみた。そして、乳首を指先で摘んだ。

「はあ.....」

ジーンと痺れた感覚が胸から全身に広がった。

鏡に近づき、鏡に映った自分の口に感情を込めてキスすると、ジワっと性器が濡れるのを感じた。

シャワー室のドアを開け、ひんやりしたタイルに膝をつけて正座し、豊かな白い乳房を揉み

出した。

「あああ……」

思わず吐息を漏らした。

午後の明かりが窓から浴室に射し込み、浴室は幻想的な雰囲気にもまれていた。

やがて、希美は尻を床につけ、鏡の前で大きく股を開いた。中学二年から生え始めた陰毛はまだ淡く、生えかけの初々しさを残していた。その淡い陰毛の隙間から、ピンク色の恥穴が覗いていた。

希美の心は淫らにときめいた。希美は指で小陰唇を軽く刺激した。

「あああ……」

思わず悲鳴が洩れた。さらに希美は腰を上げて、鏡に自分の恥穴を晒した。

「ここにいつか男の人のあれが入るのかな……」

心臓が高鳴り、淫靡な昂奮で目の前がふっと白くなった。希美は腿に力を込め、尿を少しずつ漏らした。

「はあああ……」

この恥戯は希美に強烈な罪悪感を与えた。それが性感を昂ぶらせることを希美は知っていた。

尿は膣前庭をゆっくり押し広げ、会陰からたらたらと肛門を伝わってタイルに滴り落ちた。

尿の甘い匂いが希美の鼻をついた。

失禁したことが、希美の淫ら過ぎる想いから快感を引き出した。希美の頭は次第に麻痺していった。希美は腰を痙攣させながら失禁を続けた

(ああ.....き.....気持ちいい.....)

尿を出し切った後も希美は浮かせた腰を小さく痙攣させながら、しばらくぼうっとしていた。

やがて、希美は浴槽にもたれ掛け、左手の指で陰唇を開いた。目を閉じて、愛読のレディースコミックに出てきたショッキングな場面を思い浮かべた。希美の胸が揺れた。軽やかに腿の内側を撫で、次第に性器に指を近づけていった。

(ああ.....気持ちいい.....ただ撫でてるだけなのに.....)

希美はべっとり濡れた性器全体を指で撫で、愛液と尿で濡れた指先で円を書くように敏感なクリトリスとその周辺を刺激していった。

「ああ.....気持ちいい.....」

ぴくぴくしている肛門が、時折きゅっと縮むのを感じながら、クリトリスから尿口を通り、膣に向かって指を往復させる恥戯を繰り返した。バスルームに湿った音だけがクチャクチャと鳴り響いていた。

(はあ.....気持ちいい.....私.....こんな恥ずかしいことしてる.....)

希美の腰の奥深くにズキッと鋭い快感が走った。胸はキュンと痛み、目の前が白く曇り、外界の音が消えた。腰の奥からさらに快感がこみ上げてきた。

(あああ.....こんなに濡れてるなんて.....。)

「ああん.....ああん.....あんあん.....ハアツ.....アツアツ.....ああああ！」

希美の腰は自然に大きく上下に踊りだし.....口から悲鳴が迸り出た。

人に見られたら死にたくなるような恥ずかしい姿に震えながら、ひたすら快楽を貪った。

「ああ.....いい.....あああ.....はあああ.....ああっ！　いくっ！」

一回目の波が襲って来た。目の前で星が幾つも弾け、身体の奥から次々に強烈な快感の波が寄せて来た。希美は大きな悲鳴を上げ、快感を甘受し堪能した。

「はあ.....はあ.....はあ.....」

希美の荒い息の音だけが浴室に響いた。

もう少し休みたかったが、今、再開すればもっと気持ちよくなれることを希美は知っていた。

希美は敏感になりすぎたクリトリスを無理に刺激してオナニーを再開した。

「あん.....あん.....あん.....あん、はあああ.....」

クリトリスから鋭い快感の電流が走り、腰が引けそうになったが、それに耐えながらクリトリスを刺激し続けた。見るもの全てに霧がかかってぼやけていた。しばらく我慢して続けていると、待ち続けた最高の快感がやっとやって来た。

(ああああ.....体がとろけそう.....オナニーってなんて気持ちいいのかしら.....)

強烈な卑猥さに希美の腰は再びガクガクと痙攣し始めた。

「ああああっ！」

二回目の波に襲われて、希美は身体を仰け反らせ、痙攣した。全身が鳥肌で覆われ、

体を包む幸福感に涙が出てきた。そして、数分後に正気に戻った。

オナニーを終えた希美は濡れた性器を洗おうと、股間にシャワーを当てた。

「あああっ！」

シャワーがクリトリスにあたる強烈な刺激に鳥肌がたった。性器全体が熱っぽく浮き上がり、クリトリスが麻痺しているのに気付いた。

(しばらく、敏感になったアソコをそうとしとかなきゃ.....)

希美は腰をガクガク震わせながら性器を洗った。

翌日、学校に行ってみると、クラスの女の子達が女性週刊誌を囲んでキャアキャアと騒いでいた。

「どうしたの？」

「あ、希美、オハヨー。みて、この週刊誌、隣のクラスの紀子買ったんだって。凄いこと書いてあるよ」

恵美は隣のクラスの子から借りた週刊誌を広げて希美に見せた。希美が近づいて週刊誌を覗いた。

特集記事のタイトルは「快感！ 気持ちいいセックス」。

「うわ、すごい」

希美の心臓はドキドキして来た。雑誌には、「男の子の射精の秘密」とか「彼を必ず射精に導く方法」など、刺激的なタイトルが並んでいた。

「お笑いね、このタイトル。彼を必ず射精に導く方法だって。男はえっちすると必ず出すものなのよ」

横から覗き込んでいた美佐江が言った。美佐江は希美の友人の中でも一番セックス体験が豊富だった。初体験は中学の二年のときで、それから高校二年までに既に五人の男とセックスしていた。

「そうなの？」

初体験を済ませたばかりの恵美が聞いた。

「そう、だって、出さないと治まらないんだもん」

(そうなんだ.....男の子って、えっちの時は必ず出すんだ.....)

横で聞いていた希美の心臓は、鼓動が二人に聞こえるのではないかと思うくらい、ドキドキ動いていた。

「男って、毎日、自分でシコシコやって精液出してるのよ」

「うわ、美佐江って過激！」

恵美が顔を真っ赤にして言った。

「だって、本当よ、高校生にもなれば男は百パーセントオナニーしてるのよ。クラスの男子って、全員毎日してるのよ。それも、何回も」

希美は頭の中が真っ白になってきた。

(男の子も毎日オナニーしてるんだ.....それも全員？ イケメンの山下君も高木君も？ 毎日出してるんだ)

希美は授業中、美佐江の言葉が頭から離れなかった。

学校の帰り、恵美が希美に言った。

「ねえ、あの週刊誌貸してあげようか？」

「えっ？」

「紀子から借りちゃった.....」

そうって、恵美はカバンから例の週刊誌を取り出した。

「だって、興味あるんでしょ？ バージンの希美には」

先に処女を卒業した恵美は先輩面で希美に言った。

「べ、別に！ そんなに興味ないもん！」

「ほんと？」

そうって、恵美の先を歩いた。

恵美は希美の家の前までくると、「貸して欲しかったら電話してね。持ってきてあげるから」

「いらなったら！」

恵美は笑いながら帰って言った。

(あ～あ、意地張らずに貸してもらえばよかった)

希美は週刊誌の中身が気になって仕方がなかった。

(.....あの週刊誌.....買っちゃおうかな.....恥ずかしいな.....でも、ただの女性週刊誌なんだし、どうってことないわ.....)

長い葛藤の後、希美はついに決心し、慌てて服を着替えて家を飛び出した。

希美はコンビニの前まで来て、中を覗いた。いつもなら何の躊躇もなくさっさと店に入るのに、さすがにこのときは緊張していた。

コンビニのガラス越しにある週刊誌のコーナーをみると、一人の大学生らしき男が立ち読みしていた。

(あの人.....はやく帰ってくれないかしら.....)

希美はとりあえずコンビニに入った。希美の昂ぶる胸のうちなど知る由もなく、客や店員が慌ただしく店内を行き交っていた。希美には目に映るいつもの普通の風景が、今日はいつもと違って鮮やかに感じた。

希美が店内をうろついているうちに、立ち読みしていた大学生は出ていった。

(今のうちに.....)

希美ははやる気持ちを抑えて雑誌のコーナーに向かって歩いていった。

(あ、あった)

希美の目に朝学校で見た表紙が目飛び込んだ。震える手で雑誌を取り、レジに向かった。

(普通の週刊誌を買うだけなんだから.....)

希美は自分を落ち着かせようと頑張ったが、レジまでくると頭の中は真っ白になり、唇が痺れてきた。気が付くと、いつの間にか汗ばんだ手に週刊誌と釣り銭を握り、店の外に立っていた。

希美は大急ぎで家に帰り、もどかしげに鍵を開けて自分の部屋に飛び込んだ。希美は興奮する心を落ち着かせようと深呼吸を一つした後、週刊誌の頁をめくった。

震える指で頁を進めていったとき、【彼を必ず射精に導く方法】というタイトルが目飛び込んできた。

途中、部屋のドアが開いたままなのに気付き、慌ててドアを閉めて鍵をかけた。そして、ベットに俯せになり、週刊誌の頁を捲った。

希美は目を皿のようにして文字を追った。

「龟头」「カリ」「陰茎」「睾丸」と、生々しい言葉が並んでいた。ショッキングで興奮する内容に希美は幾度も胸を押さえた。

(フェラチオ.....?ウソ.....男の子のオチンチンを舐めるなんて.....信じられない)

ペニスの何処をどうやって刺激すると気持ちいいとか、肛門や陰嚢を同時に刺激すると射精しやすいとか、陰茎の裏筋への摩擦方法とかが微に入り細に入り載っていた。射精後、親指を立て精液を搾り取る方法まで書いてあった。

(オチンチン.....って、幼稚園のころ、お父さんのを見たのが最後ね.....小学校の頃はいつもお姉ちゃんとお風呂に入っていたから.....あの柔らかなオチンチンがカチカチになるんだろうか？.....)

希美は密かに思いを寄せている姉の恋人、恭介のことを想った。

(恭介さんの精液も臭いのかな.....でも、恭介さんのだったら.....飲んでもいいナ.....オチンチンも舐めてもいいナ.....恭介さんになら一杯えっちなことされてもいい.....)

さらに週刊誌をめくっていると、女性が気持ち良さそうに脚を開いてセックスしている写真があった。

(膣にオチンチン入れるとそんなに気持ちいいの.....？　クリを触るより気持ちいいの.....？　どれほど気持ちいいの.....？　オナニーより気持ちが良いの.....？　気持ちいいこと.....してほしい.....)

それから、その記事の後半に官能小説が載ってあった。

若い不良の男に陵辱される女子高生の話であった。無理矢理、太いペニスを口に入れられる.....パンティー脱がされ、汚れた指で性器を弄ばれた後、太いペニスが女の膣に挿入される.....激しく喘ぎながら果てる女子高生。最後は男が精液を女の顔にかけて汚した.....。

(あああ.....怖い.....でも.....こんな恥ずかしいことされちゃうと私も.....)

部屋が薄暗くなり始めたころ希美は週刊誌を読み終わった。読んだ記事の全てが希美にとってはショックな内容であった。

希美はベットに仰向けに寝てショーツに手を入れた。

(ああ.....凄い.....こんなに濡れるなんて.....)

希美が濡れた性器を弄んでいると、指がクリトリスに触れた。

「ああっ！」

思わず声を漏らした。

(あああ.....もう、我慢できない.....)

ブラウスの前を開き、ブラを外すと、幼く清楚な顔に不釣り合いな豊満な乳房が出てきた。希美はいつものように乳房を揉み、指で乳首を摘んだ。ズキとする快感で性器がさらに濡れた。

(ああ.....スゴイ、ヌルヌル.....ショーツ脱がなきゃ.....汚しちゃう.....)

空想だけで湧くように愛液が出て、希美の性器はぐっしょりと濡れてしまっていた。

希美はベッドの上で着ているものを全部脱ぎ、全裸になった。そして、胡座に座り、手鏡を机の引出しから取り出した。

性器に鏡を近づけ、指でできるだけ大きく陰唇を開いて中を映して見た。

(ここにオチンチンを入れるんだ.....)

希美は膣口を指で刺激した。指が愛液で濡れた。

(指.....入れてみようかしら.....ちょっと怖いけど.....)

希美は恐る恐る指を膣に入れた。人差し指の第一関節まですんなりと中に入った。それから、一度指を抜いて再度入れてみた。今度は第二関節までヌルッと簡単に入った。希美は腰を浮かせ、そっと性器の奥まで指を入れようとした。夢中になって繰り返している内に、ようやく指の付け根まで痛みを感じることなく指が入るようになった。

(ああ.....入っちゃった.....でも.....思ったより気持ち良くないわ.....)

膣に入れた右手の中指で膣壁のあちこちを刺激していると、ぴくっと感じるポイントを見つけた。

(ああ.....ここ.....気持ちいい.....)

希美はしばらくそこを執拗に刺激した。

(ああ.....ここがGスポットなんだ.....こんなに気持ちいいなんて.....)

しばらく膣の中だけを刺激していたが、しばらくして、同時に左手の人差し指でクリトリスも擦ってみた。

(ああああ.....これ気持ちいい.....この方がずっと気持ちいい.....)

ベッドに仰向けに寝ながら、両手の指を駆使して性器を掻き回し、刺激した。

(ああっ！ スゴイ！ すごくいい！)

希美は、姉の恋人である恭介のペニスを想像しながら指を膣に出し入れした。脳がジーン

と痺れてきた。

(ああ.....だめ.....いっちゃいそう.....)

膣に入れた指の付け根部で、クリトリスに柔らかくタッチした。膣や性器全体がドロドロに愛液で溢れ、膣から漏れた愛液は尻を伝ってシーツを濡らしていた。

五分程経った頃、体に汗が出てきた。

「ああっ！ ああっ！ いいっ！ これっ、凄くいい！」

心の呟きがいつの間にか淫らな言葉になって希美の口から出ていた。

希美は一気に上り詰めたかったが、それを耐え、性器への微妙な強弱の締付けを繰り返した。

「いいっ！ こんなにいいなんて.....」

しかし、もう限界に来ていた。

希美は一気に昇り詰めるべくピッチを上げていった。

「あああっ！」

腰の奥で弾けたような性感を感じた。

「ああっ！ いきそう！ いきそうっ！」

猛烈な快美感が希美の身体全体を駆けめぐり、汗が吹き出て腰が反り返った。

「あああっ！ あああっ！ いくっ！ いっちゃうー！」

希美は恥ずかしげもなく叫び声を上げると、身体を反り返らせ、腰をぴくぴく痙攣させなが

ら絶頂へ登りつめた。

頭の中で何かが弾け、幾度も強烈な波がやってきた。これまでのオナニーで経験したことのない最高の快感であった。

その快感が少しずつ治まっていき、希美はその余韻を味わった。ベッドで腿を開いたまま、時折体を痙攣させていた。

静かに波が去り、余韻も薄れ始めたころ、心にポツと虚無感が浮かんだ。少女から女になったように感じた。たった半日で全てを知ってしまったような気持ちになった。

それとともに、激しい自己嫌悪感に襲われた。オナニーで達した後、正気に戻ったときの気持ちと同じだった。膣に挿入していた右手の中指には白い愛液がべっとりと付き、女の匂いを放っていた。

窓の隙間から初夏の夕風が静かに吹き込んできて、カーテンをゆらゆら揺らして希美の肌の上を心地よく通り過ぎた。汗が少し乾いて体がべたついてきた。

(お風呂に入らなくちゃ)

ベッドから降りティッシュで股間を拭う頃には、先程の自己嫌悪感はもう完全に払拭されていた。

（体験版はここまでです。本編を買っていただけると嬉しいです。よろしくお願いいたします。）